



Title	地域社会教育におけるアニメーションの生成過程
Author(s)	木下, 卓弥; 若杉, 鉄夫; 村尾, 政樹; 松井, 翔惟; 平子, 裕; 長谷川, 実
Citation	社会教育研究, 38, 39-48
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80493
Type	bulletin (article)
File Information	005-0913-0373-38.pdf



[Instructions for use](#)

地域社会教育におけるアニメーションの生成過程

木下 卓弥・若杉 鉄夫・村尾 政樹
松井 翔惟・平子 裕・長谷川 実¹

目 次

1. 問題の所在	39
2. 地域社会教育とアニメーションの結びつき	40
2-1. アニメーション概念と可能性	40
2-2. 地域社会教育におけるアニメーション	41
2-3. 本稿の目的	42
3. ココルームの実践分析	43
3-1. 釜ヶ崎とココルームの「井戸掘り」実践	43
3-2. 「井戸掘り」実践が創り出すアニメーション	44
3-2-1. 「井戸掘り」における表現の固有性	44
3-2-2. アニメーションの生成過程	46
3-2-3. 日常の価値観の問い直し	47
4. まとめと今後の課題	48

1. 問題の所在

今日、自立の在り方、自己形成基盤の質が問われている。経済成長期に始まり、80年代以後資本主義システムが浸透した生活空間（≒自己形成空間）は、実質的な自己決定や自立の困難を引き起こした。それは「しんどさ」「生きづらさ」と表現されるような自己疎外や社会的排除の問題として現れ、こうした自立や疎外・排除を克服する社会教育実践の模索が課題とされている。さらに言えば、今日の課題となる社会教育実践は、創造的活動による人間性回復の手立てと不可分であり、生活や暮らしの協同的、公共的再建まで視野にいれたものであることが求められる²。

¹ 問題意識や論点の整理については、2019年度を通してこのメンバーでの議論を基におこなった。

² 宮崎は若者問題と教育をめぐる「中間地帯」について、自己形成基盤の課題と克服を述べるが、成人教育、地域社会教育の領域においても中心的な課題である。宮崎隆志「中間地帯の再建による社会空間の変容—「若者問題」が要請する新たな社会教育像—」日本社会教育学会60周年記念出版部会『希望への社会教育—3.11後社会のために—』東洋館出版、2013、pp.99-116。

では、既存の社会に帰着しない自己形成および形成基盤の創造、つまり命や人間性を基盤にした豊かな暮らしの再建はどのように営まれるのか。こうした営みは、自身の生活・命を脅かすものへの抵抗的活動であると同時に、「リスクに対峙し、工夫をし、そして賭ける」という「魂の躍動」、「愉しさ」も必然的に内包される³。本稿では後者の価値に関わって、アニマシオンの概念と及び視点から、その可能性の検討を試みる。

2. 地域社会教育とアニマシオンの結びつき

2-1. アニマシオン概念と可能性

アニマシオン概念は、フランスの専門職制度をめぐる議論が中心とされる。子どもの発達や教育のかかわりでは、図書教育や読書指導、国語教育などの分野においてアニマシオン概念への注目がされている。日本社会教育とのかかわりでは、増山均が子育てという文脈において、アニマシオンがエデュカシオン、プロテクシオンを包含する本質的な価値であると主張する⁴。

アニマシオンの語義は、ラテン語の *anima*=魂・生命を語源とし、「すべての人間が持つて生まれたその命・魂を生き生きと躍動させること、あるいは動きなきものに生命をふき込み 活性化させることを意味する」⁵。アニマシオンは主に学校教育のあり方を問い直すうえで、大きな契機を与える概念であるが、社会（地域活動）・文化・芸術・スポーツ・余暇・娯楽をも含んだ広い領域にまで及び、人間性の回復と社会・文化の発展を統合する原理として用いられるようになる。こうした人間の社会的・文化的側面での精神、生命の活性化をもたらす作用に価値をおいた概念として「社会文化アニマシオン」がある⁶。この社会文化アニマシオンは「地域社会（コミュニティ）の解体と空洞化が進むなかで、子どもが育つ舞台としての地域社会の重要性を確認し、生活と交流の基盤としての地域社会を活性化する課題を浮かび上がらせる」作用を有する。

このようにアニマシオン、社会文化アニマシオンは、文化、福祉、地域社会、さらには、マイノリティーや社会文化政策の領域の諸活動・諸実践に内在する概念であることが理解できる。つまり上記で述べた自己形成や創造的活動においても、アニマシオンは生じうるものであり、その価値は成人教育、地域社会教育の領域でも重要なキーワードとなっている。したがって、既述した自立や自己形成

³ 宮崎隆志「暮らしづくりの支援における価値と意義」松田武雄編『社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ』大学教育出版、2019、p.52.

⁴ 増山は〈子育て〉が三つの内容を含んでいると述べる。第一に子どもの愛護・保護（プロテクシオン）、第二に、生き生きとした生活を大人も子どもたちも一緒に楽しむこと（アニマシオン）、第三に、素質・可能性を豊かに発展させていくこと（エデュカシオン）である。増山均『アニマシオンと日本の子育て・教育・文化』本の泉社、2018.

⁵ 同上、p.92.

⁶ 同上、p.93.

の問題にも多分に関わっていることも示唆される。

そこで、日々の生活や人間性を活性化させるアニメーション、社会文化アニメーションに焦点をあてることで、暮らしや生活の再建につながる創造的活動の本質や条件など、さらに言えば疎外や排除の克服の可能性を検討していく。なお本稿では、個人的な「魂の活性化」から社会的、文化的なものへと伸展する過程に着目するため、「社会文化アニメーション」の意味・価値を含めて、以降「アニメーション」と表記を統一する。

2-2. 地域社会教育におけるアニメーション

1970年代以降、子どもと社会教育の議論において、アニメーションは「自由時間」や「余暇」が不可欠なものとしていた。しかし余暇や自由時間の保障が課題と言及されながらも、そうした子どもの遊びの観点からの条件整備の議論は、アニメーションの生成過程や意義までも限定的にしてしまう。

加えて、資本主義システムの浸透した個別化個人化が徹底する生活は、他者と協働的に構築していく自己の存在・形成基盤の崩壊のリスクを伴う⁷。このような社会の実態を踏まえれば、子ども、若者、大人の余暇や自由の在り方も資本主義システムに規定される危険性があり、消費的、個人的、埋没的な「楽しさ」に陥ってしまいかねない。

したがって、今日の自立や疎外の課題に対して、アニメーションの生成プロセスやその意義を明らかにするためには、共同体・コミュニティ、協働の観点が不可欠であり、地域社会教育との関連の中で検討することが求められる。

ではこうしたアニメーションの価値が、地域社会教育とどのように結びつくのか。この点について宮崎隆志の「暮らしづくりの支援における価値と意義」⁸を参照にしたい。

宮崎は、暮らし（主体的に構成された生活）には、そこに関わった人々の想いが刻まれ、人間らしさが反映されるとし、そうした暮らしは「自分が自分らしくある喜び（joy）の基盤」となると指摘する⁹。こうした well-being（＝よりよく生きる）、喜び・愉しさに価値をおく評価尺度としてアニメーションが位置付けられている。

つまり、生活を豊かにする営みそのものが創作活動であり、その活動プロセスには「自分らしさ」を相互承認する他者の存在と、そうした他者との関わり（協働）によって生まれるアニメーションがある。アニメーションの生成には、他者との協働及び共同体が不可分であることが理解できる。

さらに和歌山市を拠点に事業を展開する「一麦会（通称・麦の郷）」の事例を提示し、アニメーションは自由時間に限定されるのではなく、労働活動や生活活動においても捉えられると言及する。

麦の郷は、無認可共同作業所を出発点に、障害者、障害乳幼児、不登校児、高齢者の問題にとりく

⁷ 宮崎（2013）、前掲論文。

⁸ 宮崎（2019）、前掲論文。

⁹ 同上、p.51.

む総合リハビリテーション施設である。創造的活動と労働がどのように結ばれているのか、共同作業所の風景の一部を抜粋する¹⁰。

ある作業所では、自閉症の若者がおかきの製造を担当しているが、鉄道マニアである彼は、おかきを切符に見立て、天日干しの作業は人一倍丁寧にこなす。彼にとって、もち米の蒸し器は蒸気機関であり、噴き出る水蒸気は機関車の煙や汽笛を連想させる。他の職場では「仕事ができない」という評価しか受けなかった彼が、ここでは生き生きと働き、かつ質の高いおかきづくりになくってはならない担い手になっている。

こうした作業展開を保障することで、他者・社会とのかかわりで展開する活動の全体を把握し、その上で自身の役割や意味、そして活動自体の社会的意味が自覚される。さらに、人間社会の基盤にある命の循環や相互扶助を理解できる仕事、または工夫・挑戦ができる仕事が模索されてゆく。

このような意識化や活動の拡張には、支援者が労働の意味を問い直し、アニメーションを結びつけた点が大きく作用している¹¹。生活とアニメーションとの関連で言えば、労働自体を創造的活動の延長上に位置付けることが可能であり、そうした意識を共通課題（この場合支援者・利用者ともに）にまで引き上げていくことの重要性が示唆される。そうした意識変容、実践展開が、「生きやすさ」（自立の可能性）や、「自分らしくある」自己形成を保障する社会、地域、コミュニティづくりの基盤となっていくと考えられる。

以上より、アニメーションは地域社会教育との関連の中で、生活空間や労働空間における他者との協働やコミュニティのなか、その活動のプロセスで生成されうる可能性をもっていることが理解できる。またアニメーションが内在する社会福祉実践、教育実践には、既存の社会システムのもつ「生きづらさ」「しんどさ」を克服、人間性や命を軸にした暮らしの再建するための重要な概念と位置づけられる。アニメーションの視点で暮らしや自己形成を再検討していくことは、これからの（地域）社会教育の方向性・価値を探ることにおいても不可欠な作業であるだろう。

2-3. 本稿の目的

資本主義システムの浸透する合理的、個人的、消費的な生活空間や、それに伴う自立の困難、疎外や排除の問題に対して、社会教育ではどのような方向性・価値に基づいてそれらの壁を乗り越えていけばよいのか。その再建の視点としてアニメーションを提起し、その可能性について述べてきた。だが、その可能性と意義は明示されているが、実際の実践に即してその生成プロセス、価値の共有の実態について踏み込めていない。

¹⁰ 同上、pp.52-53.

¹¹ 同上

そこで本稿では、実際の社会教育実践においてアニメーションがどのように生成されているのか、その価値がコミュニティでどのように自覚、共有されているのか明らかにすることを目的とする。その際、大阪市西成区の通称・釜ヶ崎で取り組まれているアート系の NPO 法人「こえとことばとこころの部屋（通称：ココルーム）」における実践を対象とする。ココルームでは日常的から多様な取り組みが展開されているが、「井戸掘り」の実践を中心的な対象実践とする。この事例における、アニメーションの内実やその生成のプロセス、その価値が参加者のなかでどのように共有されているかに焦点を当てていく。

3. ココルームの実践分析

3-1. 釜ヶ崎とココルームの「井戸掘り」実践

ココルームが位置する大阪・釜ヶ崎は、日雇い労働者やホームレスが多く暮らす日本最大のドヤ街として知られてきた。資本主義的都市化の胎動とともに成立した釜ヶ崎は、戦後、「農業の機械化や炭鉱の閉山、造船不況等により故郷から弾き出された人々を吸収」し、その生活拠点であり続けてきた¹²。

「井戸掘り」は、この釜ヶ崎に 2008 年から拠点を移したココルームが運営する「釜ヶ崎芸術大学」における講座の一環として取り組まれた。アフガニスタンでペシャワール会の水源確保事業に参加し、400 以上の井戸を掘ってきた蓮岡修さんとこれまで日本の地面を掘って（土木作業に携わって）きた「釜のおっちゃん」（元・現役の日雇い労働者）が「講師」となって取り組まれた、協同の作業であった¹³。

ココルームの活動は、これまでも「表現の場をつくる」という言葉を大切に続けられてきたが、水道に不便のない現在の大阪という場所で、なぜ「井戸を掘る」という表現活動に至ったのだろうか。代表の上田は、「井戸掘り」の取り組みを始めるにあたってこのように記している。

「東日本大震災から 8 年がすぎ、エネルギーや非日常へのおもいも、日常のなかでは薄くなっているような気がします。そんないまだから、生存をささえる水を素人の手で汲んでみたいとおもいます。」¹⁴

2011 年の東日本大震災と連動して発生した福島での原発事故は、社会の「成長」が、何を代償としてもたらされてきたのかを鋭く突き付けた。人々の暮らしの根源的な基盤であった土地や自然は、回復不可能なまでに汚染され、多くの人々が故郷を追いやられた。

それにもかかわらず、東京を中心とした大都市の機能は、何事もなかったかのように維持され、早々

¹² 原口剛『叫びの都市一寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』洛北出版、2016、p.22.

¹³ 「NPO 法人こえとことばの部屋 cocoroom」ホームページ「釜芸、井戸を掘る」<https://cocoroom.org> 最終閲覧 2020 年 7 月 25 日.

¹⁴ 同上.

と「通常運転」を取り戻している。強制的に土地を離れざるを得なかった者、放射能を浴びながら作業を続けた除染作業員たちの存在や苦しみは、大都市圏の「豊かさ」と表裏一体に構成されるはずであるが、それらは次第に後景に退き、顧みられることもなくなってしまう。

先の引用は、変わり目にある今日の釜ヶ崎の姿を意図して発せられた言葉であろう。寄せ場が急速に解体されてゆく中で、景観だけでなく、その場所に対する人々の記憶もまた薄れつつあるという¹⁵。日雇の求人は、1989年のピークを境に減少の一途をたどり、いまの釜ヶ崎には、生活保護を受給しながら生活する元日雇い労働者向けのマンションが立ち並ぶ。インバウンドに対応したホテル建設など地域開発が進んでいる。

高速道路や港湾、空港といった日本の高度経済成長の土台を作り、底辺から支えてきた「釜のおっちゃん」は高齢化し、町も変貌を遂げていく。釜ヶ崎で生きたおっちゃん存在はなかったことにされ、街の記憶もまた薄れつつある¹⁶。

こうした中で取り組まれた「井戸掘り」の実践は、釜ヶ崎という場所の中で「おっちゃん」たちが生きてきた意味や歴史の確かさを、そこに集った参加者の前に再現させてゆくような企画であった。

3-2. 「井戸掘り」実践が創り出すアニメーション

以下では、「井戸掘り」実践における、いくつかの具体的なエピソードに即して、そこに潜むアニメーションの要素、生成過程について確認していく。

3-2-1. 「井戸掘り」における表現の固有性

「井戸掘り」は、コロシアムにおける表現活動の一つとして取り組まれたものであるが、その特徴は以下の点に見出せる。それは、詩や演劇といった言葉を介した表現・創作活動に比べて、おっちゃんたちが歩んできた固有の経験や記憶が、より自然に、細部に亘って表現される点である¹⁷。「掘る」という行為は、おっちゃんにとって、身体の奥底に眠っていた記憶や経験（土の匂い、手捌き）を無意識的に呼び覚ます。その姿を言葉にするならば、魂の次元からの躍動といえるだろう。下線部の語りからはそのことが端的に読み取れる。

「おじさんたちの変化もすごい感じました。釜芸に参加してくれているおじさんたちもちろんきてくれていて、ある日雨が降ったんですね。だから作業が出来なかった日に、せっかくだからおじさんたちのこれまでの仕事の話を開いてみましょうっていう場にしたんですよ。そしたら、

¹⁵ 原口剛 (2016)、前掲書。

¹⁶ 2019年11月28日、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 W402 でインタビューを行った。このインタビューの文字起こし記録について、以降「インタビュー資料」と記載する。p.40.

¹⁷ 同上、p.20.

参加者がですね、掘るのがうまいおじさんたちを尊敬しているわけですよ。うまいこと知っていて、そうするとですね、おじさんの口から仕事の話が出るわ出るわ。その、釜芸の場でもそれはしてくれてたんですけど、その細部であるとか、自分の気持ちのことだとか、そういうのまでもう、乗せて話してくれてたんですね。それはやっぱり、みんなと一緒に作業をして、すごい掘り方教えたくなかったっていう思いで見つめているからだと思うんですね。」¹⁸

「おじさん達のなんという鮮やかなスコップの捌き方という、おじさんたちが凄すぎて何が起きているかわからないくらい、今までの詩や俳句の講座を以上に『井戸掘り』講座のときが一番生き生きとした顔を見せてくれるのね。」¹⁹

「まあそんなふうにあの、井戸掘りという大事業だったんですけど、いろんなことが起こり、あ、そう。子どもが釜のおっちゃんをどう呼んでも釜のおっちゃんなんですよ。大体釜のおっさんです。それが尊敬語になって、ちょっと、釜のおっちゃんっていうんですけど、それが先生とかって呼ぶとか、そういうのが作れたことがよかったですね。」²⁰

自然に、そして詳細に表現ができるのは、井戸を掘るという行為が、おっちゃんの中に眠っていた記憶や経験を、意識的なレベルのみならず、身体のより深い次元（＝魂）から呼び起こすからであろう。例えば、コッルームにおける詩を創作するワークショップは、言葉を媒介して経験や記憶を振り返り、表現する機会といえるが、井戸掘りを通した表現とは、苦戦しながら井戸を掘り進める多くの参加者に対して、「つい掘り方を教えたくなる」といったかたちで自然と「湧き出てくる」ものであったといえる。

「尊敬」という言葉も出てくるように、日常の中では再現され得ないおっちゃんの躍動感や生き生きとした姿（＝アニメーション）は、作業の最中に度々立ち現れ、参加者の間で共感的に受容されるようになる。井戸を掘りだす前までは想像しなかった程に、おっちゃんが遅しく、生き生きと井戸を掘る姿は、外からやってきた参加者にとっても、おっちゃんへの信頼感、尊敬をもたらしていた。釜ヶ崎という場所で生きてきたおっちゃんの歴史や経験がもつ意味に改めて向き合うとともに、自己の考え方（価値感）をも問い直す契機となっていたと考えられる。

¹⁸ インタビュー資料、pp.19-20.

¹⁹ 杉本恭子『自分のいのちをつなぐ水、人に任せっきりでいいのかな？』大 阪・釜ヶ崎にであいと表現の場をつくる『コッルーム』が井戸を掘り、その方法を共有する理由とは？」<https://greenz.jp> 最終閲覧 2020年7月25日.

²⁰ インタビュー資料、p.20.

3-2-2. アニメーションの生成過程

しかし、こうした協働の過程では、葛藤や対立も避けられない。共通の目的を持って集っているはずの参加者の間でも、互いの差異が顕在化し、場合によっては分裂や解散へと至ることもあるだろう。下線部からは、こうした局面が、井戸掘りへの参加者の間でも生じていたことが読み取れる。

「本当に困難なことが起こるんですよ。いきなり地面落ちるんですからね。朝起きたら地面落ちてたってことがあって、何か... (中略) そういう、なんか、想像したこともないことに直面していくわけですから、それを一個一個乗り越えていくんですよ。まあ私が乗り越えられるわけじゃなくて、その現場監督とか、スタッフのみんなとかが工夫してですね、持ってる知恵と技術でですね、やってくれるんですけど... (中略) そういうことをしながら、本当にやり遂げていくっていうのは、まあ、別にやればできるんだっていう言葉じゃないんですけど、やれるんやっていう逞しさですね。それは自分の中に生まれたな。井戸も掘ったしな、みたいな。」²¹

下線部にあるように、井戸掘り中盤の過程では、「朝起きたら地面が落ちている」といった困難に直面する。こうした局面では、指導的で、技術のある誰かに完成までの任務を託す、あるいは、目標の達成（ここでは、井戸の完成）そのものを諦めるという可能性すらあっただろう。それでも諦めることなく完成に向けて協働を進められたのはなぜか。

この出来事にかかわって、上田さんは、井戸掘りを通してみんなが「非常に、逞しくなった」と語る。エピソードに即して理解するならば、その逞しさとは、「朝起きたら地面が落ちてる」といった「想定したこともないことに直面」した際に、参加者同士が互いの知恵や力を寄り合わせ、乗り越えることができたという経験に裏打ちされたものであるといえよう。

協働の過程においては、葛藤や対立といった困難が常に隣り合わせであるが、そこでは、むしろ個々の参加者が持つ差異や多様な経験が局面を打開する上での「引き出し」となり、原動力となりうる。井戸掘りにおける協働の過程をみれば、おっちゃんの豊かな技術や経験こそが、「地面が落ちる」という不測の事態を打開する際の鍵になっていた（といっても過言ではない）。

『掘る人を井戸の底に下し、掘った土を汲み上げる』というのは単純な作業ですが、慎重な連携プレーが必要。その日出会ったばかりの人同士でも自然と連帯感が生まれます。井戸の中に入って土を掘るのは一人だけど、上にはロープを引っ張る人、バケツを受け取る人、バケツの土を捨てに行く人など、5人ぐらい頑張って行。掘り終えて引っ張り上げてもらうときには、みんなが「おかえりー！」って声をかけてくれる。それがとても「いい感じ」なの。」²²

²¹ インタビュー資料、p.27.

²² 「NPO 法人こえとことばの部屋 cocoroom」ホームページ「釜芸アーカイブ」、<https://cocoroom.org> 最終閲覧2020年7月25日.

下線部に示されるように、協働の過程では「喜び」や「愉しさ」が生成し得る。しかしながら、井戸掘り実践に即せば、それが可能になったのは、その過程に伴う困難を参加者同士が協力して潜り抜けた経験があったからであった。井戸掘り実践の特質は、普段は「助けられる側」として認識されていた「釜のおっちゃん」が、むしろ作業進行の中核を担った点であり、そのおっちゃんとの新たな出会い・発見を通して、参加者の中にそれ以前とは異なった価値（意味）への転換が生じ、共有されていたと言えるだろう。

3-2-3. 日常の価値観の問い直し

井戸掘り実践で共有されていた価値（意味）とはどのようなものとして表せるだろうか。それがまさしくアニメーションなのではないかと考えた。

「掘っている人たちの様子は「もう井戸に夢中」という感じで、「掘る」というプリミティブな行為は、人間の本能を掻き立てるものなのだろう²³。最初は怖がっていた小さな子どもさえお父さんと一緒に井戸の底へ入る。ひとしきり小さなスコップで井戸を掘ると、なかなかのドヤ顔で地上にあがって来る。」

「参加者一同、水が出てきたことに大興奮しました。作業の効率も大事ですが、参加者の方々は想定外の事が起こることにも面白さを感じておられるようです。そこが釜芸らしいところでもあります。」²⁴

下線部からも分かるように、井戸掘りの実践は、参加者にとって「作業の効率」よりも「想定外」の事態の発生に面白さを感じられるような場になっていった。「夢中」、「本能を掻き立てる」という上田さんの表現からは、井戸掘りの参加者が、ワクワクやドキドキする感覚（＝アニメーション）を共有していたことが読み取れる。

繰り返しになるが、こうした個々人が感じた「愉しさ」は、協働の経験を経て生成され、共有されていたものであった。そして、それは、幾多の困難に直面しながらも互いに差異を持つ他者同士が協力し合あい乗り越えていく過程でもあった。このようにみれば、コルムにおける井戸掘りの実践とは、自分自身が楽しいと思える、自由な空間を、参加者自らが協同的に創り出したものであったといえるだろう。

昨今では、異質な他者同士が互いに排除し合うことによって、自己の安定を保つ＝排除型自己形成

²³ 杉本恭子、前掲。

²⁴ 「NPO 法人こえとことばの部屋 cocoroom」ホームページ「釜芸アーカイブ」、前掲。

の様式が一般化しつつある²⁵。井戸掘りの経験とは、まさに社会の底辺に追いやられ、異質な他者として蔑ろにされてきた「釜のおっちゃん」の記憶や経験と出会い直していくことを通して、自らの日常を支える価値観を批判的に対象化し（とすれば、自分も加害者性なのかもしれないということを経験し）、転換していく為の視座を与えるものであったといえないだろうか。

4. まとめと今後の課題

本稿では、ココルームの井戸掘り実践における、アニメーションの内実やその生成のプロセス、その価値が参加者のなかでどのように共有されているかを明らかにすることを目的とした。

井戸掘り実践では、日常的なココルーム実践における抽象的・断片的な表現活動とは異なり、労働者の生き様を具体的・身体的に表出させる機会であった。また、作業過程には必ず不測の事態や問題が現れ、その課題に対して協働によって乗り越える動きが読み取れる。それは、他の参加者が労働者の経験知（技能）に触れて、その価値（凄さ、面白さ）を身体的に獲得していくことであった。

資本主義システムにおいて、一般的には参加者と労働者は、排除する/されるの世界で分離する立場であるが、井戸掘り実践において上記の交流を経ることで、その差異を愉しみながら受容していく展開が読み取れた。その展開のなかで、アニメーションは実践の各所及び全体に散りばめられており、それは労働者にとっては井戸掘りという表現活動自体であり、他の参加者にとっては労働者との経験出会いの中にあり、さらに両者にとっては差異を乗り越える中で生まれたものでもあった。

以上より、アニメーションが井戸掘り実践の協働的活動のなかで生成されていたこと、また矛盾を乗り越える中で生成されたアニメーションには、自己疎外や社会的排除を克服する人間回復の手立てとなりえることが理解できる。そういう意味で、アニメーションは自己形成、自立の問題を検討する上で不可欠な視座であることが示せるだろう。

ただし、地域社会教育において既存の社会を創りかえるという意味においては、まだ実践内部の展開という見方も否めない。またこうした実践がより広く地域へ、社会へと拡張していく上で、アニメーションの視点から捉えることにも限界がある。学習やケアとの関連も含めて、どのように生活や暮らしを協働的、公共的に再建していくのか、今後の課題としたい。

²⁵ 宮崎隆志「協働に基づくケア・コミュニティの意義—排除型自己形成を超えるために」『臨床教育学研究』第6号、2018、pp.21-22.